

## ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースイー著『被造物の驚異と万物の珍奇』(1)

守川 知子\* 監訳  
ペルシア語百科全書研究会 訳注

### 解題

ここに連載形式で初めて訳出する書物『被造物の驚異と万物の珍奇』は、ペルシア語で記された「博物誌」の一種である。著者の名前や執筆年など、本書については不明な点が多いが、以下では、本書から明らかとなる情報をもとに、底本とした刊本の校訂者 M. Sotūde 氏の序文 (Tehran, 1345s/1966, pp. 17-26) を参考にしつつ、簡単な解題を付す。

#### 本書について

本書は、セルジューク朝最後の君主トゥグリル3世 (Rukn al-Dīn Abū Ṭālib Ṭuġril b. Arslān b. Ṭuġril, 在位 571-590/1175-94年) に献呈すべく著された百科全書 (博物誌) 的書物である。

書名はいくつか知られているが、著者自らが序文の中で言及しており、最もふさわしいと思われるものは、『被造物の驚異と万物の珍奇 (‘Ajāyib al-Maḥlūqāt wa Ġarāyib al-Mawjūdāt)』である。そのほか、『驚異の書 (‘Ajāyib-nāma)』および『世界を映す杯 (Jām-i Gūī-namā)』と、本書を指し示している箇所も本書の序文の中には見受けられる。そのため、後二者も書名的一种とみなし得るが、著者自らは「本書を『被造物の驚異と万物の珍奇』と名づけよう」と記しており、『被造物の驚異と万物の珍奇』をここでは正式な書名として採用する。

本書は序文と10の部分 (rukṅ) からなる。序文では「言葉」「学識」「書物」の重要性が繰り返して述べられ、本書の執筆動機や目次が配されている。一方10章立ての本論は、「天の玉座たる珠 (durrat al-‘arš) から [本書を] 始め、大地の微粒子 (ḡarrat al-farš) で終える」とあるように、最も崇高な「天の玉座」に始まり、動物の中でも最も卑しい蚊で締めくくられている。10の章立ては以下のとおりである。

- 第1部：天体の驚異
- 第2部：火・天地の間で生じるものの驚異
- 第3部：大地・水・海の驚異
- 第4部：諸都市の驚異
- 第5部：樹木・香草の驚異
- 第6部：彫像・墓廟の驚異
- 第7部：人間の驚異
- 第8部：ジン・シャイターンの驚異
- 第9部：鳥の驚異
- 第10部：動物の驚異

第1部の天体の章では、「天の玉座」に続き、天使あるいは霊的なもの、天の北極・南極とその星座、天の構造、太陽・月と諸惑星、十二宮について記述され、第2部では火の構造と性質、稲妻・雷鳴、

---

\* 北海道大学大学院文学研究科准教授

虹、彗星・流星、空気、風、雲について、第3部は水の構造と性質に始まり、世界の海・湖、河川・泉、井戸がアルファベット順に紹介され、続いて土の構造と大地の様相、アルファベット順による世界の山、鉱石・宝石、岩石・石碑について記される。第4部では、各地のモスクや教会、世界の諸都市がアルファベット順に配され、さらに地形が陥没・埋没・転覆した土地のことや地震、疫病、石や礫が降った事例など過去の天災について述べられる。第5部では木・果樹・香木・花などの植物について、第6部では、各地の彫像・石像、預言者や王たちの墓廟、各地に隠された財宝について、そして第7部では、人間の構造と性質、および動物との違い、理性や靈魂、五感、人体の部位や女性の特性、各民族・集団、預言者伝・偉人伝、奇跡、錬金術、医学・治療法、食事、神の定め、眠り・夢、死について述べられている。第8部では、ジン、ナスナース、ゲールといった人間でも天使でもないものについて、第9部では猛禽・家禽など鳥について、そして最後の第10部では、海や陸の動物、蛇・トカゲ、昆虫について記される。

本論の中では、世界中の諸都市について述べられた第4部が比較的大きな章となっており、全体の3割近くを占めている。これは、本書がそれ以前の「地理書」の伝統を受け継いでいることを如実に示しているが、他方、上に挙げた内容を見ても明らかのように、本書では、従来の地理書とは異なり、天にあるさまざまな驚異から、地上に存在する多種多様なものの驚異について、まさに書名にあるとおり、「万物」すべてを網羅した、非常に広範囲な事象について扱っている。第7部もまた大部な章で全体の2割近くを占めており、創造主による最良の被造物である「人間」について著者が多大な関心を抱いていることが窺われよう。本書は全体で、校訂本では636ページに及ぶ大著である。

上に見たように、本書の特徴はまず、「世界百科的書物」であるという点である。同様の百科全書書物は、本書の登場と相前後して数点が確認されている（J.H. Kramers, *First Encyclopaedia of Islam*, vol. IX, Supplement）。本書とほぼ同時代のものとして、Abū Hāmid Ġarnāfī Andalusī（565/1169年没）の東方への旅行に基づくアラビア語の旅行記『精髓の贈り物と驚愕の精粹（*Tuḥfat al-Albāb wa Nuḥbat al-Iḡāb*）』（558/1162年頃執筆）が挙げられる。時期的には本書よりわずかに先行し、見聞による各地の驚異譚を多く含むとはいえ、アンダルスのグラナダ出身者による旅行記と、本書との関係は未だ明らかにはされていない。一方、本書の1世紀のちには、Zakariyā Qazwīnī（682/1283年没）による本書と同名の書『被造物の驚異と万物の珍奇（*ʿAjāʾib al-Maḥlūqāt wa Ġarāʾib al-Mawjūdāt*）』がアラビア語およびペルシア語で執筆されている。本書以上に内容や構成が体系立てられているため、現在ではこのQazwīnīの著作の方が有名になっており、『被造物の驚異』といえはQazwīnīの著作として思い浮かべられることが多い。がしかし、たとえば、Qazwīnīはその構成を天上界と地上界の二つに大きく分け、そして天上界では諸天、恒星・惑星、天使、時間・暦について、また地上界では、火・空気・水・大地の四要素と、鉱物・植物・動物（人間、ジン、獣、鳥、昆虫）について記している。Qazwīnīが使用したこのような枠組みは、書名同様に、本書『被造物の驚異』と酷似しており、内容すべてを踏襲した訳ではないにせよ、Qazwīnīが本書から多大な影響を受けたことは明らかである。またペルシア語圏について見ると、605/1208-09年にホラズム・シャーに献呈されたMuḥammad b. Najīb Bukrānの『世界の書（*Jahān-nāma*）』が地理書形式ではあるものの、本書の数十年後にペルシア語で執筆されており、同様の驚異譚を多く含む点をはじめ、書名や構成の面で本書の影響を受けたと考えられる。

本書のもう一つの特徴は、モンゴル侵入以前のペルシア語で書かれていることである。この時代のペルシア語の特徴として、音写や表記法、単語の使い方、アラビア語単語の複数形の表し方、動

詞の用法、そして何よりも多用される古いペルシア語と文法上の破格表現など、モンゴル時代以降やあるいは現代のペルシア語とは異なる言い回しが非常に多く見られる。これら文法上の詳細については、Sotūde 氏の一覧（校訂者序 pp.27-35）があるので、そちらを参照していただきたい。文法や表記法上の特徴に加えて、本書においては、アラビア語に対して逐一ペルシア語訳を付している場合が頻繁に見られる。これは、イスラームが入ってきたイランの地において、サーサーン朝時代の中世ペルシア語（パフラヴィー語）が使用されなくなり、文章語はアラビア語にほぼ取って代わられた後、10世紀から11世紀にかけて中央アジアやイランでは、徐々にペルシア語が文章語として復活していくことと機を同じくしている。この時代、ペルシア語はまず韻文として発展したが、その後多くの著述家がアラビア語のみならずペルシア語でも作品を残すようになり、その際、アラビア語に不慣れた読者層を意識し、ペルシア語に翻訳しているのである。これもまた、モンゴル以前のペルシア語文献のきわだった特徴として挙げられよう。

本書はまた、天のことから地上のことまで、西はアンダルスやフランクのことから、東はインドや中国まで、空間的にも地理的にも幅広くさまざまな事象を扱っているが、難解な教義や論理に終始するのではなく、むしろ基本的な百科全書や博物誌として、読者の興味を喚起すべく努めている。本書の最大の特徴として、非常に多くの逸話や摩訶不思議な話がちりばめられていることを忘れてはならないだろう。

### 著者について

著者については、その名前からして正確には知られていない。校訂者の Sotūde 氏によると、本書には14種類の写本が確認されているが、ほとんどの写本には著者自らの名前が記されておらず、同定が困難だとされる。

17世紀の Ḥājī Ḥalīfa (Kātib Çelebi, 1657年没) は、アラビア語・ペルシア語・トルコ語の浩瀚な目録『疑問の氷解 (Kaşf al-Zunūn)』において、『被造物の驚異』の著者の名を、“Muḥammad b. Maḥmūd b. Aḥmad Ṭūsī Salmānī” と記している。また、ベルリン国立図書館所蔵写本カタログでは、本書と断定し得る一写本 (Nr.344) について、著者の名を“Aḥmad Ṭūsī (Aḥmad von Tūs)” と記しており、この名もまたその可能性として指摘されている。そのほか、“Muḥammad b. Maḥmūd b. Aḥmad al-Tayyirī/al-Ṭabarī al-Salmānī” や “Abū Bakr Aḥmad Ṭūsī” という名前が本書に関して言及されている。このように著者は、おおむねトゥース出身者を示す Ṭūsī というニスバを有するものの、本書の記述内容から明らかなように、イラン西部の町ハマダーンの出身者であるか、あるいはハマダーンで一定期間暮らしていたと考えられる。本文中の記述によると、100歳もの寿命があった彼の父親は、ほぼ全生涯をハマダーンで過ごし、また彼自身は、イスファハーンへの旅の際に、ハマダーンにある「アルヴァンド碑文」について尋ねられ、まだ見ていなかったことと後に実際に見物に出かけたことを正直に述べている。このような点から、本訳注の底本とした Sotūde 本では、“Muḥammad b. Maḥmūd Ṭūsī Salmānī Hamadānī” が著者の正式な名前であろうと判断し、またもう一種類の刊本 (Tehran, 1375s/1996) では、著者がハマダーン出身者であることは揺るぎない事実だとして “Ṭūsī” のニスバを排し、著者の名は “Muḥammad b. Maḥmūd Hamadānī” だとされている。本訳注においては、現段階では著者の名前に関する決め手はないので、底本とした Sotūde 氏の見解に従い、Muḥammad b. Maḥmūd Ṭūsī (ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー) と考えておきたい。

本書の執筆年もまた不明であるが、セルジューク朝のトゥグルル3世の名が言及されていることから、彼の統治期である1175年から1194年の間に完成したものと考えられる。先述の Ḥājī Ḥalīfa

は、本書の執筆年をヒジュラ暦 555 年（西暦 1160 年）としている。しかし、ニーシャープールがグズ（オグズ）の侵攻（555/1160 年）によって荒廃したとの記述や、地震の項の中で 561/1165-66 年と 562/1166-67 年の言及があり、さらにエジプトのカイロが、アイユブ朝の *Ṣalāḥ al-Dīn* (589/1193 年没) によってイスマール派（ファティマ朝）の手から解放された話（567/1171 年）があることから、1170 年代以降に完成したことはほぼ間違いない。ただし、校訂本で 636 ページもの大著であることから、本論についてはトゥグリル 3 世の治世以前から書き始めていたとしてもおかしくはなく、また序文に関しては、写本間でその内容が異なるため、著者は何度か序文を書き直した可能性がある。いずれにせよ、おおそ 12 世紀後半から同世紀末にかけての作品と考えてよからう。

著者が述べる本書の執筆動機は、「本書の読者が、世界の方々や隅々を巡ることなく、また陸や海を踏破することなしに、世界の驚異や当代の珍奇のすべてについて情報を獲得し、大地の姿を知り、至高なる神は被造物を何種類に分けて創造したのか、またどの集団に目をかけ、神の怒りはどの集団を破滅の風で滅ぼしたのかを知るようにするためであり、さらには、そのような世界中の驚異を知るにあたって、「すべての人が諸国を歩き巡るだけの財力を持たず、そのような「読者が実際には目にしたことがないものをも見るができるように、私は、これまで人々が見聞きしてきた世界の驚異を記し、さまざまな姿かたちについてできる限り描いていこう。そして本書に『被造物の驚異と万物の珍奇』と名づけよう。そうすれば、人々は本書を読み、至高なる創造主の御業を知り、思索することができるだろう」と述べている。ここに記されているように、まずは世界や被造物について知ること、そしてそれら万物を知ることを通じて、神の「創造」という行為を知り、ひいては「神」そのものを知ることが、本書の最大の目的となっている。

著者は、「言葉」や「学識」や「知識」というものを重視し、それらの伝達媒体である多くの「書物」と交わる学究の徒であった。本書は著者が老境に入ってから記されたと考えられるが、『被造物の驚異』の執筆に先立ち、著者は、「アラビア語やペルシア語で多くの著作をあらわした」と述べている。書名のわかるものは、『諸預言者伝 (*Qiṣaṣ-i Anbiyā*)』と、病人治療の医学書と思われる『特例集 (*Dustūr Usūl al-Hawāṣṣ*)』であるが、これらの書物については、著者が本書の中で触れている以上には特に情報がなく、今日ではまったく知られていない。ただし、著者が医学に通じていたことは本書の記述から確認される。

書物を重視し、広く研鑽を積んだと思われる著者の学問的経歴については、具体的な事例を挙げることはできない。しかし本書では、『ローマ史 (*Tārīḥ-i Rūm*)』、『バビロンの書 (*Kitāb-i Bābul/Bābulī*)』、『天の星座図の書 (*Kitāb Ṣuwar al-Falaki*)』、『自然の書 (*Kitāb-i Ṭabāyi*)』などの書名が挙げられている。この中では、‘Abd al-Rahmān al-Ṣūfī (376/986 年没) が著したと思しき『星座図の書』を除き、いずれも現在は知られていない書物ばかりである。一方、著者が書名ではなく人名を挙げている例として、Ibn Muqaffa’ (138/756 年頃没)、Ṭabarī (310/923 年没) といった歴史家や著述家があり、さらにはガレノスやプトレマイオス、ヒポクラテス、アリストテレス、アポロニオスといったギリシアの自然科学者たちや Ibn Sīnā (428/1037 年没) の名が挙がる。そのほか、ハディース集の大家 Buḥārī (256/870 年没) の『真正集 (*Jāmi’-i Ṣaḥīḥ*)』に言及し、ハディースの徒と考えられる数十名もの人物名を挙げつつ多種多様な話を伝えており、著者がハディースを重視していた姿勢が窺われる。また名前は挙げられていないものの著者が依拠していたであろう書物として、Ibn Faḍlān (4/10 世紀) や Abū Dulaf (4/10 世紀中葉) の旅行記、『シナ・インド物語 (中国とインドの諸情報)』(3-4/9-10 世紀) や Buzurg b. Ṣahriyār (4/10 世紀) の『インドの不思議』といった先行する地理書

や不思議譚集、ペルシア語詩人であった Firdawsī (416/1025 年没) の『王の書 (*Šāh-nāma*)』や Sanā'ī (422/1031 年頃没) の『真実の園 (*Ḥadīqat al-Haḡīqa*)』といったペルシア語詩集や文学書がある。これらの典拠をもとに、著者は縦横無尽にその知識を駆り、多くの逸話を挿入する。ときどどのような関連性から述べられたのか判断しがたい逸話もあるが、それらもまた、著者の博識ぶりを裏打ちするものであろう。可能性の域を出ないが、ハマダーン出身でイスファハーンに旅行したと考えられる著者の経歴から、セルジューク朝期に建設されたイスファハーンの学問府ニザーミーヤ学院で著者は研鑽を積んだのかもしれない。いずれにせよ著者は、先人の書物や旅行者からの情報をもとに本書を執筆しており、その広範な知識は、当時の学問状況の一端を我々に伝えている。

著者の思想や信条について、Sotūde 氏はおそらくはシャーフィイー派ではないかと述べているが、スンナ派であることは疑いなく、信仰心厚いムスリムであり、『クルアーン』やハディースを重視する姿勢が本書中の随所に見られる。また特に第1部の天体や星座に関する記述から明らかなように、哲学者や自然科学者に対してはきわめて批判的であり、軽蔑と言ってもよいほどの厳しいまなざしを向けている。さらに、拝火教徒やザンダカ主義者に対する目線も厳しく、「無知蒙昧の輩」と切り捨てる。シーア派に対してはさほど否定的ではないものの、教友たちへの呪詛を行うがゆえにふさわしくないと考えていたようである。シーア派への批判が強くないのは、セルジューク朝支配下で勢力をふるったニザール派への配慮があるのだろうか。ただいずれの見解も、著者の姿勢は、読者がまず知ることが肝要だと考えるものであり、批判を加えつつも、それぞれの集団の見解そのものに手を加えることはほとんどせず、そのまま紹介されている。

また、著者はアラビア語に通じているが、先にも述べたように本書は、その重要な箇所ではアラビア語とペルシア語が併記され、『クルアーン』をはじめ、アラビア語の部分は努めてペルシア語に翻訳されている。これは、当時のペルシア語文献の大きな特徴であり、アラビア語に通じた著者が、ペルシア語を解する読者に向けて噛み砕いて説明するというスタイルである。

ところで、序文の中で著者は、トゥグリル3世の「公正と統治と慈悲」に感謝し、彼の徳を知らしめ、その名を不朽のものとするため、本書を執筆したと述べているが、一方で、「この帝王の圧制を受けずに安らいでいたことに感謝する」ために著した、とも述べており、実際にはトゥグリル3世と近い間柄ではなく、年齢差によるものか、若干距離を置いた関係であったことを窺わせる。トゥグリル3世は、同時代史料ではその学識を広く賞賛され、ロマンス叙事詩の大詩人 Nizāmī (605/1209 年頃没) の『ホスロウとシーリーン (*Husraw wa Sīrīn*)』が彼の求めで詩作されたことや、Rāwandī (6-7/12-13 世紀) のセルジューク朝史『胸襟の安らぎと喜悅の徴 (*Rāhat al-Šudūr wa Āyat al-Surūr*)』がこの王のために執筆されたが、王の敗死により、やむを得ずルーム・セルジューク朝の王に献上されたことなどで有名である。しかし、わずか7歳で即位したトゥグリルの治世期にはセルジューク朝はすでに、それ以前に端を発した西方での十字軍、および東方ではカラ・ヒタイやそれに続くオグズの西進により、往時の勢力をほぼ完全に失い、1157年の Sanjar (在位 1117-57 年) の死をもって王朝は滅亡へと向かう時期にあった。著者の暮らした西部イランは12世紀後半には混乱をきわめ、王子の後見人の立場からのし上がったアタ・ベクらの干渉、そしてファーターマ朝やニザール派といったシーア派政権の躍動があった。トゥグリル3世は、1194年にホラズム・シャー朝との戦いで戦死し、ここにイランを支配したセルジューク朝は完全に滅亡する。ときに厭世感や虚無感が漂う本書には、学問状況のみならず政治状況においてもまた、当時の世相が色濃く影を落としているのだろう。

### 校訂本・写本について

以下の2種の校訂本がある。

- ① Ed. by Manūčehr Sotūde, *'Ajāyib al-Maḥlūqāt*, Dānešgāh-e Tehrān, Tehran, 1345s/1966, 35+711p.
- ② Ed. by Ja'far Modarres Šādeqī, *'Ajāyib-nāma ('Ajā'ib al-Maḥlūqāt wa Ġarā'ib al-Mawjūdāt)*, Našr-e Markaz, Tehran, 1375s/1996, 38+568p.

訳注にあたり、底本とするのは、原典により忠実であり、写本間の異同についても記されている①の Sotūde 本である。もっとも日本語訳の正確さを期すため、②の Šādeqī 本も適宜利用するが、この Šādeqī 本は、読者の便宜を図ろうと、校訂者が原著の構成を大幅に入れ替えているのみならず、「ペルシア語古典文学書」として現代イランの大学生を読者層に設定しているため、アラビア語を極力排すなど、テキストに手を加えている。排されるアラビア語は、本書においてしばしば引用される『クルアーン』の章句として例外ではなく、このような編集方法は著者の意図を正確に把握する妨げとなろう。また Šādeqī 本には、依拠した写本に関する情報もまったく記されていない。そのため今回の訳注においては、Šādeqī 本は参考程度にとどめ、校訂本間の異同については、重要でない限りは特に断っていない。なお Sotūde 本には、巻末 (pp. 690–711) に、イランの碩学 Mojtabā Mīnovī 氏によるテキストの訂正および補注の一覧表が載っており、きわめて有用なものとなっている。今回、原文への忠実さを期すため、繁雑になろうともアラビア語・ペルシア語双方の日本語訳を載せ、かつ基本的には、Mīnovī 氏の訂正を反映させた上で訳出していることに注意されたい。

写本は、現在、イスタンブールやベルリン、ウィーン、カイロ、ケンブリッジ、サンクト・ペテルブルクなどにある14種が知られている。その中で Sotūde 氏が参照したのは下記の①～③の写本であり、なかでも①が底本とされている。

- ① Fātiḥ, No. 4173 写本：116葉、Ibrāhīm b. Yūsuf b. Ibrāhīm 筆、A.H. 740年 Ša'bān 月9日書写
- ② Lālā Ismā'īl Efendi, No. 554 写本：186葉、Ḥāfiẓ b. Ḥifiẓ Allāh Pīr Ḥasan Ṭawīl 筆、A.H. 806年 Šawwāl 月6日書写
- ③ Dr. Aṣḡar Maḥdawī 所蔵写本：Ḥāfiẓ Rūmi 筆、A.H. 884年 Rabī' II 月28日書写

『被造物の驚異』は、Qazwīnī の書も含めて、非常に多くの挿絵や地図が入っていることで有名である。今回の訳出では、信頼に足る校訂本が存在すること、および不思議譚を扱うという内容上の特性から写本間の相違は大きいであろうことに加え、写本に含まれる図版をすべて紹介することはできないと判断し、写本はまったく利用しなかった。

### 「ペルシア語百科全書研究会」について

本研究会は、京都大学文学部西南アジア史学研究室の有志を中心に、主にペルシア語文献を読了することを目的に活動している。前身は井谷銅造氏や黒田卓氏、稲葉穰氏を中心となった「イスラーム地理書・旅行記研究会」であり、『アブー・ドゥラフのイラン旅行記』（昭和堂印刷所、1988年）や著者不明『世界の諸地域 (*Hudūd al-'Ālam*)』（372/982–3年献呈）、Iṣṭahṛī (4/10世紀) の『諸道と諸国 (*al-Masālik wa al-Mamālik*)』、Ḥamd Allāh Mustawfī (744/1344年没) の『心魂の歓喜 (*Nuzhat al-Qulūb*)』など、アラビア語やペルシア語の地理書や旅行記を翻訳していた。その後、井谷氏や稲葉氏を中心に、モンゴル以前のペルシア語文献を読むようになり、Niẓām al-Mulk (485/1092年没) の『統治の書 (*Siyāsat-nāma/Siyar al-Mulūk*)』、Kay Kāwūs (5/11世紀後半) の『カーブースの書 (*Qābūs-nāma*)』と読み進め、伝 Umar Ḥayyām 著『ノウルーズの書 (*Nawrūz-nāma*)』（2009年訳注刊行予定）を2003年3月には読了、本書『被造物の驚異』に至った。

本研究会は、2003年4月より月1回のペースで集まり、担当者が日本語訳注をつくることでトゥーサー著『被造物の驚異』を読み進めてきたが、すでに5年以上の歳月が経ち、メンバーの変遷は著しい。当初のメンバーは、京都大学文学部西南アジア史学研究室の稲葉穰、守川知子、和田郁子、二宮文子、杉山雅樹であり、その後、塩野崎信也、井上美輪、増子明代、中島祥子、橋本陽、諫早庸一、小倉智史ら、西南アジア史学の学生・院生に加えて、聴講生や文学部東洋史学研究室の学生、さらには神戸大学の院生がそのときどきに参加した。現在は、和田、二宮、杉山、塩野崎、小倉をはじめ、堀川永、大東敬典、小泉真吾が中心となって翻訳を担当している。なかでも杉山は当研究会唯一の一貫した中心メンバーであり、また出版の運びとなった今回の作業においては、数々の労をとってくれた二宮の尽力を抜きには語れない。

本書を選定したのは監訳者でもある本解題の筆者だが、本史料の選定理由は、モンゴル時代以前のペルシア語文献であること、それまでの読書会での原典史料が「ナーメ(書)」という表題をもっていたこと、内容が広範であるため参加者の興味を喚起しやすいと考えたことなどであり、当初はQazwīnīの同名の書『被造物の驚異』を読む予定であった。しかし、Qazwīnī版は、良質の校訂本がなく、かつ膨大な写本や、アラビア語版とペルシア語版の双方を参照することは時間を要するため、類書である本書に変更した次第である。選定当初は、単に、当時の知識人がどのような世界観を有しているのか興味があり、またこれまでの教訓・鑑文学である「ナーメ文学」作品と比べて、自然科学分野に重点が置かれていることによる物珍しさもあったが、実際に翻訳を始めてみると、日本語訳を作成するという作業は非常に難航した。理由としてはまず、破格のペルシア語が多いというテキストの特徴によるところが大きい。加えて、第1部の「天体の驚異」など、研究会メンバーの能力を超える部分が少なくはなく、かつ著者が依拠した書物等、典拠が不明であったり、あるいは著者の見解や解釈になじみがないなど、著者と我々翻訳者との隔たりが大きかったことも翻訳に際して障壁となった一因である。そして何よりも、本書が驚異譚や珍奇譚を主たる題材としているため、話の内容がどのような方向へ行くのか、想像力を働かせてよいものかどうか、ペルシア語の文法に則って考える以上に、訳出が困難な箇所が続出し、担当者の頭を悩ませることがしばしばあった。しかしこれらのことはすべて、現代の我々の「知力」や「学識」が、著者の有していた当時の「学問的常識」に到底かなわないことから来ているにすぎず、ひとえに我々の力不足のゆえである。それでもなお、本書の翻訳にこだわったのは、モンゴル以前の中東世界や西アジア・イスラーム社会の知識人の知のあり方を知るには、これまでの「文系的」な著作に加えて、当時の文献史料の多くを占める「自然科学的」な著作にも触れていくことの必要性を痛感したからである。今回の訳注では、未だ不十分な箇所が多々あろうが、それらの責任はすべて監訳者が負う。知識の乏しさを恥じつつも、当時の知的環境をより広く深く理解するために、読者諸賢のご教示を願いたい。

今回、京都大学イスラーム地域研究センターの仁子寿晴氏のご厚意により、『イスラーム世界研究』誌上にて、本訳注を連載形式で出版する運びとなった。宇宙論を含み、各地域の地理や、鉱物・植物・動物など万物を網羅した世界百科全書であり、当時の知識人のすがたを伝えてくれるきわめて貴重かつ重要な書物である本書を日本語で出版するという幸運を授けていただいたのは、本研究会にとっては望外の喜びである。また、我々の乏しい知識を補うため、天体の箇所については、京都産業大学の山本啓二氏より多大なご教示をいただいた。お二人に対して、ここに記して謝意を表す。本訳注が、当時の知識人の世界観を解する一助となれば幸いである。

(文責：守川知子)

## 凡例

- ・ 本稿は、ムハンマド・ブン・マフムード・トゥーシー著『被造物の驚異と万物の珍奇』の日本語訳注である。訳注にあたっては、ソトゥーデ校訂本（Ed. by M. Sotūde, Tehran, 1966）を底本とする。
- ・ テキストに関しては、ソトゥーデ校訂本の巻末（pp. 690-711）にある、M. ミーノヴィー氏による訂正および補注も参照する。
- ・ サーデギー校訂本（Ed. by J. M. Šādiqī, Tehran, 1996）に関しては、省略が多いため、必要な場合のみ明記するにとどめる。
- ・ [ ] は訳語の補い、〔 〕 は別の写本からの補いを示す。
- ・ 地名や人名の初出時には、（ ）内に原語のアルファベット表記を入れる。
- ・ 預言者の名については、すべてアラビア語表記とし、初出時に（ ）内に一般的な表記を入れる。たとえば、スライマーン（ソロモン）など。
- ・ 原文がアラビア語の部分（『クルアーン』引用、祈願文を含む）は、フォントを中ゴシック体にする。
- ・ 『クルアーン』の引用は、日本ムスリム協会『日亜対訳 注解 聖クルアーン』（第5版）に基づく。
- ・ 略号 *EF* は、*Encyclopaedia of Islam*, 2nd. Edition を、*Elr* は、*Encyclopædia Iranica* を指す。



## ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースイー著『被造物の驚異と万物の珍奇』

(p. 1) 慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において

神に感謝と称讃あれ。神こそは、我々の存在を一塊の黒土より生ぜしめ、恩寵 (karāma) の衣を我々に被せたお方である。「われはアーダム (アダム) (Ādam) の子孫を重んじた (karramnā)」 [Q17: 70] とあるように。また、我々の内面 (darūn) を「信仰 (īmān)」の光によって輝かせ、我々の頭蓋に2つの灯りをともしたお方である。それによってそのお方の力の徴を我々が見ることができるようになる。「さあアッラーの慈悲の跡をよくみるがいい」 [Q30: 50] とあるように。また我々の精神 (damīr) の庵室に2つの窓を開き、それによって「わたしたちの人々よ、アッラーに招く者に答えて、かれを信じなさい」 [Q46: 31] という呼びかけを聞くことができるようにし、そして我々の本質 (nihād) を、そのお方を認識する場である「理性 ('aql)」という装飾で飾られたのである。

また、そのお方の御使いムハンマド・ブン・アブドゥッラー・ブン・アブド・アル＝ムッタリブ (Muḥammad b. 'Abd Allāh b. 'Abd al-Muṭṭalib) ——「汝がいなければ、われは諸天を創りはしなかった」とあるように<sup>1)</sup>、その清らかなる本質こそが世界と世界の人々の創造の原因である——と、彼の友、[彼によって] 選ばれし者、そして彼の家の人々に、無数の賛美と限りない祝福あれ。彼らはみな、信仰の灯火であり、信心の鍵である。彼らすべてにアッラーの満足があらんことを。

さて、他の動物たちに比べて、アーダムの子 [たる人間] (ādami) にある長所と優越性は、ただアーダムの末裔であるということ (ādamiy) のみならず、「弁舌 (nutq)」の才と、賢人たちが「思考 (fikr)」と呼んでいる認識能力 (quwwat-i idrāk) によっているのだと知らねばならない。もしそうでなければ、我々の預言者——彼にアッラーの祝福あれ——は「言葉 (suḥan)」を誇ることはせず、「私はアラブとアジャム [の言葉] に通じている」と公の場で唱えはしなかったであろう。また、預言者ダーウード (ダビデ) (Dāwūd) (p. 2) ——彼にアッラーの祝福あれ——はこの大地の宿から去るとき、息子たちに次のように言った。「私は1つの宝をつくり、それに封印をかけた。誰であれそれを開ける者こそが、私の後継者となろう」と。その宝を開けてみると、10の箴言があった。スライマーン (ソロモン) (Sulaymān) はそれによって、ジンと人、陸と海、獣と鳥たちの王権を得たのである。

かつて、地上に現れた王や皇帝たちはみな、「学識 (dāniš)」以外を誇ることはせず、彼らの名は、学識によらずしては歴史のページに残ることはなかった。それゆえ我々は、栄光なる神が人と人の子に施された恩恵とは、[まさしく] 弁舌という飾りと言葉という財産だと知るのである。しかし、文字や音声が組み合わさってできたものすべてを「言葉」と言い表すことはできず、またそれを誇りにすることができるわけでもない。なぜなら「言葉」とは、話し手の口から聞き手の耳に届いたとき、それによって気質には新鮮さが、魂には安らぎが生じるものでなければならないからである。[そのような言葉であるならば、] 聴覚は砂糖のごとき甘美さを味わい、心は心地よさから安らぐものとなる。かくしてそのような言葉は、歴史の1ページに永遠に残るにふさわしいものとなり、賢人や学者たちはそれを享受し、作者の名はそれによって不朽のものとなろう。

私は、私の死後、読む者すべてが神の慈悲をもって私のことを記憶するような記念碑的作品を著

1) 「クルアーン」にはこの表現は見られない。

そうと望み、大いに熟考し、思索の騎馬を思考の荒野に駆った。そして、あらゆる学問分野において、アラビア語やペルシア語で多くの著作をあらわした後、本書を執筆すること以上に良いことはないと思に至った。それは、本書の読者が (p. 3) 世界の方々や隅々を巡ることなく、また陸や海を踏破することなしに、世界の驚異や当代の珍奇のすべてについて情報を獲得し、[大地の姿を知り、] 至高なる神は被造物を何種類に分けて創造したのか、またどの集団に目をかけ、神の怒りはどの集団を破滅の風で滅ぼしたのかを知るようにするためである。この願いは、たとえば世界を巡ったイスカンダル (アレクサンドロス) (Iskandar) や、諸国を歩き回ったマルヤムの子イーサー (マリアの子イエス) (‘Īsā b. Maryam) のような旅人には [容易に] 叶えられよう。[ところで] イーサーには、[アッラーの言葉であり、その靈魂である (kalimat Allāh wa rūḥu-hu)<sup>2)</sup>] という称号があり、アッラーのお赦しにより死者を蘇らせたが、[それはまさに] 当世の驚異であり、時代の奇譚であった。[彼はまた、]「清浄なる女性の息子である清浄なる者 (al-ṭāhir b. al-ṭāhira)」、「マスィーフ (al-masīḥ)」、「聖なる魂の主 (dū al-nafs al-muqaddasa)」、「処女たる娘の息子 (ibn al-‘aḍrā’ al-batūl)」[と呼ばれるが、] 世界を多く巡ったために「マスィーフ (旅する者)」と名づけられたのである<sup>3)</sup>。

使徒の栄光を備える [神の] 友イブラーヒーム (アブラハム) (Ibrāhīm al-ḥalīl) のことを考えてみよ。彼は死んだ動物のそばを通り過ぎたとき、言った。「神よ、死んだものをどうやって生き返らせるのか、お見せ下さい。」

至高なるアッラーは言った。「汝は、われが死んだものを生き返らせることを知らないのか。」

[イブラーヒームは] 言った。「知っております。しかし、私はこの目で見たいのです。」

至高なる神は、彼に命じて言った。「4羽の鳥をとれ」[Q2: 260] と。すなわち [ペルシア語では] 「4羽の鳥を捕まえ、すべてを八つ裂きにして、4つの山の上に置け。そしてそれらと呼ばば、われがどうやって死んだものを生き返らせるのか、汝は見ることであろう。」

イブラーヒームは鴨、孔雀、カラス、雄鶏を殺し、すべてを八つ裂きにして、4つの山の上に置いた。そして (p. 4) [山の] 真ん中に立ち、すべてを呼んだ。[すると、] 肉、骨、羽毛が互いに別々になり、それぞれの部位が元の体を目指して [集まり、] 生き返ってイブラーヒームの手に止まった。鳥の羽毛は1枚として別の鳥の羽毛と混じってはいなかった。創造主は言った。「アッラーは全知全能だと知るがよい」<sup>4)</sup>。

#### <問答>

もし、「動物たちの中でこの4種の鳥に決めたのはなぜか」と問われたら、次のように答えよう。「鴨は大変卑しく、孔雀は高慢で、雄鶏は好色で、カラスは物集めに貪欲である。[この4種を集めた意味は] つまり、これらの非難すべき性質を自身から遠ざけよ、ということである」と。加えてこの逸話の意図は、イブラーヒーム——彼に平安あれ——が、たとえ心で真実だとわかっていることでも、その目で見ようとした、ということにある。

2) イーサーは、アッラーがマルヤムに託した言葉であり、アッラーから発した靈力である、とのハディースの文言をふまえた表現か [プハーリー著、牧野信也訳『ハディース 中巻』中央公論社、1993年、「預言者達」章47、210頁]。

3) 「マスィーフ」は本来、m-s-h 語根の分詞形「油を注がれた者」すなわち「メシア (救世主)」の意であるが、ここでは s-w-h 語根に読みかえ「旅する者」という意を引き出した著者の解釈に従い、前出の箇所ではあえて訳出しなかった。

4) この話のあらすじは、『クルアーン』第2章260節に見られる。

知れ。ある男がシャーム (Šām) で瀉血をし、マグリブ (Magrib) で爪を切り、マシュリク (Mašriq) で髪を剃る。そして紅海で溺れ、魚が彼を飲み込む。ついでその魚は両断され、半分は陸に打ちあげられ、獣がそれを食べる。もう半分は海の中でサメに食べられる。後にそれらの排泄物が乾き、そこから煉瓦がつくられ、やがては路傍で粉々になる。もしそういうことがあるとしても、イスラフール (Isrāfil) ——彼に平安あれ——がラッパを吹き鳴らし、「おお、バラバラになった骨よ、散り散りになった髪の毛よ、[ずたずたになった皮よ]！」と呼びかけると、[それら] すべてが集まるのである。まさに、(p. 5) 「言ってみよう。『最初にみつくりになった方が、かれらを生き返らせる』」[Q36: 79] というお言葉のとおり、創造主は「もの (a'yan)」の創造において全能であられる。

さて私がこの書を著すのは、すべての人が諸国を歩き巡るだけの財力を持たないがゆえである。[読者が実際には] 目にしたことがないものをも見るができるように、私は、これまで人々が見聞きしてきた世界の驚異を記し、[さまざまな] 姿かたちについてできる限り描いていこう。そして本書に『被造物の驚異と万物の珍奇 (‘Ajāyib al-Maḥlūqāt wa Ġarāyib al-Mawjūdāt)』と名づけよう。そうすれば、人々は本書を読み、至高なる創造主の御業を知り、思索することができるだろう。預言者——彼に平安あれ——が、「一時の沈思熟考は 60 年の信仰儀礼 (‘ibādat) にもまさる」<sup>5)</sup>、すなわち [ペルシア語では] 「創造主の御業について、ひととき思い巡らすことは、60 年間の信仰儀礼よりも良い」とおっしゃっているように。

#### <逸話>

イスカンダルは世界中の国々を征服し、諸地方を巡り、さまざまな知識を手に入れると、ヒンドの王カイド (Kayd malik al-Hind<sup>6)</sup>) に、次のような手紙を送った。「服従せよ。さもなくば、他の王たちと同様のことがおまえにも起きるだろう。」

カイドは返書をしたためた。「あなたは世界を征服し、私の王国をも奪おうとしているが、無常の世をなぜ自慢されるのか？」

イスカンダルは返事を出した。「おまえは何を誇りとするのか？」

カイドは言った。「私は知識を誇りとする。あなたは私の知識 [がどれほどのものか] 知ることはできないが、[かわりに] あなたのところに 2 人の識者を送ろう。1 人は (p. 6) 賢人なる哲学者、もう 1 人は医者<sup>7)</sup> だ。」

彼らがイスカンダルのもとへ到着すると、イスカンダルは壺に牛脂を満たし、哲学者に送った<sup>8)</sup>。哲学者は鉄製の針 1000 本を壺の中に刺し、イスカンダルに送り返した。イスカンダルはそ

5) 「一時の沈思熟考は 1 年の信仰儀礼にもまさる」という文言は、ガザーリー (1111 年没) の『宗教諸学の再興 (Ihyā’ ‘Ulūm al-Dīn)』の「沈思熟考の書」の中に見られ、また、イブン・ヒッバーン (965 年没) の『威厳の書 (Kitāb al-‘Azama)』ではアブー・フライラ伝のハディースとして記されている。「60 年の信仰儀礼」とするイスナードも存在するが脆弱であり、同様に、「80 年」とするものもあるという [Abū Ḥamid Muḥammad al-Gazzālī, *Ihyā’ ‘Ulūm al-Dīn*, al-Fajāla: Maktabat Miṣr, 1998, al-juz’ al-rābi’, p. 501]。

6) イスカンダル (アレクサンドロス) と同時代のインドの王として、文学作品でしばしば言及される人物。実在の人物との同定は困難であるが、アレクサンドロスが紀元前 357 年にインド征服を行ったとき、インドには 3 人の有力者がいたとされ、なかでも懐柔に時間のかかったパンジャーブ地方のポロスの王を指すか。フェルドウスイー (1025 年没) 著『王の書 (Šāh-nāma)』では、カイドはイスカンダルに、自分の娘、盃、医者、哲学者の 4 つの宝を渡し、イスカンダルがそれぞれを試す話が載せられており、これらの宝によってイスカンダルの気鬱や悩みや不眠は取り除かれる [Abū al-Qāsim Manṣūr Firdawsi, *Šāh-nāma*, Ed. M.D. Siyāqī, Čāpḥāna-yi ‘Ilmī, Tehran, 1344s, vol. 4, pp. 1602-1613]。

7) 原文には HYRWAN al-ṭabīb とあるが、HYRWAN の意味は不明。薬剤師か本草学者の意、あるいは人名か。

8) 『王の書』では、牛脂に刺された針からつくられたのは印章であり、その黒い鉄製の印章を哲学者が鏡に仕立て

の針から1枚の鏡をつくり、哲学者のもとへ送った。哲学者は鏡を磨き、送り返した。

そこでイスカンドルは彼を呼びだし、尋ねた。「おまえに送った脂は何であったか？」

哲学者は答えた。「あなたは、脂で満たされた水差しと同様に、ご自身が知識で満たされており、いかなる知識ももはや入る余地はない、とお示しになりました。私はそこに針を刺し、まだ場所があることを示したのです。するとあなたは針から鏡をつくられました。あまりにも多くの血を流したために、自分の心が固まってしまったことを示すためです。そこで私はそれを磨き、私が忠告をもってあなたの心を和らげようとしていることを示しました。」

<逸話>

ついでイスカンドルは医者を召しだし、言った。「そもそも病とはいったいどうして生じるのか？」

彼は答えた。「人々がよく知らないものを食べるからです。」

〔イスカンドルは〕言った。「では、薬の奥義とは何か？」

彼は答えた。「適切なものを食することです。さて王よ、私はあなたに練り薬を差し上げましょう。〔それを〕飲めば、害のあるものはあなたの体が受けつけないようになります。」

(p.7) イスカンドルは言った。「これはまた、たいそうなことを言うものだ。」

そこで〔医者〕は練り薬を調合した。イスカンドルが〔それを〕飲むと、害をもたらすような欲望がすべて彼の心から消え去ってしまった。ついで〔医者〕は別の練り薬を調合し、イスカンドルはそれを服用した。すると体に良いものは何であれ、欲するようになったのである<sup>9)</sup>。

<逸話>

次のように言われている。イスカンドルが厠に行くと、彼をじっと見つめるものの姿が見えた。イスカンドルは怖れ、尋ねた。「おまえはだれだ？」

〔それは〕言った。「私は『欠陥 (nuqsān)』だ。おまえの体内に入るためにやってきたのだ。」

〔言うや否や、それは〕イスカンドルの体の中に飛び込んだ。イスカンドルが〔厠から〕出てくると、医者には彼に言った。「なにゆえ苦しそうにしているのですか？」

イスカンドルは、「知らぬ」といって、病のことを隠した。

翌日医者には言った。「私はあなたの病を治療するために参っております。あなたは何を隠しているらっしゃるのですか？」

イスカンドルは言った。「私が痛みを感じているというのに、どうしてそれを治療しないのだ？」

医者には薬を調合し、イスカンドルのところへ持っていった。イスカンドルは厠に入り、また例の影を見た。

それは言った。「イスカンドルよ。私は立ち去るぞ。」

イスカンドルは尋ねた。「なぜだ？」

それは言った。「あの医者はある薬を調合した。おまえがそれを飲めば、私は焼かれてしまうだろう。」

イスカンドルは厠から出てきても何も言わなかった。医者にはイスカンドルをじっと見つめ、そし

直し、それがすぐに黒ずむことに関して今一度イスカンドルとの間にやり取りがある以外は、話の筋は同じである [Firdawsī, *Šāh-nāma*, vol. 4, pp. 1608–1610]。ニザーミー (1209年頃没) 著『イスカンドルの書 (*Iskandar-nāma*)』にも同様の話が見られる [Nizāmī Ganjavī, *Iskandar-nāma*, Ed. H. P. Baḥṭiyārī, Tehran, 1982, p. 221]。

9) 『王の書』では、体調を崩すのは食べすぎるからだと言われ、山に生える植物から薬を調合する [Firdawsī, *Šāh-nāma*, vol. 4, pp. 1610–1612]。

て腕から[薬を]流し捨てた。イスカンドルは言った。「なぜ流してしまったのだ?」

医者と言った。「厠に行かれたときは、病根はまだあなたのうちにありました。しかし出てこられたとき、病根は消えていました。」

イスカンドルは(p. 8)この賢人の知識に驚いた。これらの賢人たちはイスカンドルのもとでますます敬意を払われるようになった。[イスカンドルは]言った。「この識者たちは、私にとって世界中の宝物すべてと同じくらい貴重だ。」

このことについて、至高なる神はおっしゃっている。「知っている者と、知らない者と同じであろうか」[Q39: 9]と。

#### <逸話>

次のように言われている。イスカンドルは自分がどこで死ぬのかを知りたいと願った。ある識者が彼に告げた。「イスカンドルは、鉄の大地と黄金の空がある場所で死ぬだろう」と。彼がダームガン(Dāmḡān)にやって来て、草原で苦しみ出すと、鎧が敷き延べられた。イスカンドルはその上に横たわった。さらに黄金の盾が、日除けのために彼の上に差しかけられた。イスカンドルはそれを見て、死期が近づいていることを思い出した。彼はアンムーリヤ(‘Ammūriya)<sup>10)</sup>の自分の母親に手紙を書いた。

「[おお母上、]お知りください。この世は死の母であり、消滅の父であります。生きとし生ける者すべてにとって、[それは]一時的に託されたものであり、託されたものは返さねばならないのです。月は満ちると欠け、欠けてしまうと満ちていきます。死はあらゆるところに降り注ぐ雨のようなものです。たとえ私の王権がこの世から断ち切られるとしても、私の知識の足跡は永遠に残ります。母親に授けられた息子というのはみな仮の存在であり、この世もまた仮のものです。私は[命を神の手に]お返しします。あなたへの[最後の]挨拶を送ります。[今ひとときの]辛抱です。(p. 9)母上、お知りください。私が去り行くとしても、あなたもここには長くは留まれないでしょう。たとえ私があなたのもとへたどり着かなくても、あなたが私のところにやって来るでしょう。平安あれ。」

この逸話を記したのは、王権や帝王権は誰の手にも[永遠に]残ることはなく、学識以外に何ものをも誇るべきではない、ということを示すためである。

#### <逸話>

賢人ルクマーン(Luqmān-i ḥakīm)<sup>11)</sup>は黒人であった。彼はある男の奴隷で、その男は多くの奴隷を所有していたが、[とりわけ]ルクマーンに目をかけていたため、他の奴隷たちにとっては面白くなかった。ある日、[男は]ルクマーンに言った。「羊を1頭殺せ。そしてその最も良い部位を持って来い。」

ルクマーンは舌と心臓を持ってきた。

そこで[男は]言った。「羊をもう1頭殺せ。そしてその最も悪い部位を持って来い。」

ルクマーンは舌と心臓を持ってきた。

10) ルームの町とされる。本書第4部参照。

11) イスラーム以前のアラブの伝説的英雄であり、賢人として知られる。一神教徒として、また子に信心深い訓戒を与える賢明な父として『クルアーン』第31章にも登場する。その叡智と長寿で知られ、寿命は560年、1000年、3000年、3500年であったとも言われる。のちに、イソップ物語と類似した寓話の作者とされた。ペルシア文学では、ルーミー(1273年没)やサーディー(1292年頃没)によって採り上げられている。詳しいことは明らかではないが、エチオピア人であり、奴隷あるいは大工であったと伝えられる[EP: Luqmān]。

〔男は〕 奴隷たちに尋ねた。「なぜ彼はこのようにしたのか？」

彼らにはわからなかった。男はルクマーンに尋ねた。「これにはどのような意味があるのだ？」

〔ルクマーンは〕 言った。「学があれば、体の各部の中で舌と心臓にまさるものは何ひとつとしてありません。そして、無知であれば、舌と心臓ほどに劣る部位はないのです。」

そこで主人は奴隷たちに言った。「私は、このような学識のゆえに、彼に目をかけているのだぞ。」

これほどまでに学識者や賢人たちは常に重用され、国は学識でもって治められてきたのである。そうであるからこそ、ある王が現世から旅立てば、臣民の中で、より学識ある者に国は委ねられ、そのような人々はそれぞれに〔知識の〕 編纂と収集に勤しんできた。たとえば公正なるヌーシラヴァーン (Nūshirawān-i ‘ādil)<sup>2)</sup> と (p. 10) ボズルグメフル (Buzurjmīhr)<sup>3)</sup> が、『カリラ (Kalīla) 〔とディムナ〕<sup>4)</sup> を編纂し、ユークリッド (Iqlīdas) を定着させ、チェスを定め、さまざまな書をまとめたように<sup>5)</sup>、彼ら〔の名〕 はそれらによってこそ記憶されるのである。またアブドゥルマリク・ブン・マルワーン (‘Abd al-Malik b. Marwān)<sup>6)</sup> は、毎年役人たちを学術的な問いで試し、より知識のある者は誰であれその領地を増し、無知だと判明した者は罷免した。

創造主は預言者——彼に平安あれ——におっしゃっている。〔(祈って) 言いなさい。『主よ、わたしの知識を深めて下さい』〕 [Q20: 114] と。

知識とは2つの面から成り立っている。1つは来世が永遠であると知り、来世に備えることである。もう1つは現世がはかないものだと知り、現世の虚飾や無用さや調和のなさを知り、貴重な生涯を現世に費やさないことである。

私は知性の許すかぎり、常に現世について考えてきた。初め、私は精液であり、子宮の中にいた。狭く、暗い闇の中に。〔そこから〕 解放されると、しばらくの間、乳を飲むことに苦勞し、揺り籠やおくるみの厄介になった。乳離れをすると、今度は学校や読み書きの苦勞を味わった。そして結婚相手を探し求め、女たちの愚痴と媚びにうんざりし、ついでさまざまな病に見舞われ、老いと病気で衰弱し、嫉妬深い人々や敵を嘆き、圧制に苦しめられた。ああ、わが生涯たるや！人が生まれて、このような苦勞を何もせずに、平穩に一生を過ごすとしても、結局は死が待っている。そのとき、友や妻子や財産との別れは、死がその人にとっての安らぎとなるようにしてくれる。いわく、

死んだ者は、死によって安らぐことはない

死とは、生きている者たちにとってのみ訪れる<sup>17)</sup>

人は、あらゆる災厄を免れても、死という災厄は免れることがない。それはまるで、樹上にある

12) サーサーン朝期の王ホスロウ1世(在位531-579年)のこと。「ヌーシラヴァーン(元来はアノーシャグ・ルワーン)」は「不滅の魂」の意であり、彼はまた「公正王」の異名をもつ。

13) ヌーシラヴァーン時代の名宰相として名高い人物。名前は「大いなる親愛」という意味で、アラビア語での表記は「ブズルジュミフル」である [Elr: Bozorgmehr-e Boktagān]。

14) インドの動物寓話『パンチャタトラ』をもとに、サーサーン朝時代にパフラヴィー語に翻訳され、イスラーム時代にさらにアラビア語訳された文学作品。

15) ギリシア語やサンスクリット語の古典文献のパフラヴィー語への翻訳活動の最盛期は、サーサーン朝のホスロウ1世時代である。アラビア語史料にも、ホスロウがギリシア語の古典を翻訳してその内容を広めたとの記述が見られるが、その中にユークリッドの著作が含まれていたかは確定できない [ディミトリ・グタス著、山本啓二訳『ギリシア思想とアラビア文化』勁草書房、2002年、28-29頁、44-47頁]。

16) ウマイヤ朝第5代カリフ(在位685-705年)。

17) ‘Adī b. al-Ra‘īla’ という人物による詩の一部 [Ibn Manzūr, *Lisān al-‘Arab*, Ed. A. M. ‘Abd al-Wahhāb and M. ‘Ubaydī, Beirut, 1419/1999, vol. 13, p. 217]。

果実のようなものである。[果実は]たとえ石に打たれたり風に傷められたりしなくても、熟すれば落ちる。私は自分の生きている時間について次のように考えた。一生というものは、最大でも60年であろう。そのうちの半分は眠りであり、[もう半分の]30年が残る。30年のうち15年は、幼少期と(p. 11)青年期である。[残りの]15年で何をすることができるのか。この[老境の]数年間でいったい何を生み出せるのか。あらゆる災厄が降りかかるというのに。

子供の頃、私は次のような夢を見た。世界中が水浸しだった。私は水辺に行き、高い城を見た。1人の女が馱馬に乗って中から出てきた。手には鏡を持っていた。彼女は[それを]私に渡し、言った。「世界とは大喰らいの蛇のようなもの。それが1000年もの間、被造物を喰らいに喰らっておる。それでもまだ蛇は腹をすかせている。慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において、『人間には(人間と)呼ぶことも出来ない時期があったではないか』[Q76: 1]云々。」

夢の意味はつまり、この世は貪欲に喰らう竜のようであり、それは何千年もの間、被造物を喰らい続け、それでもまだ飢えている、ということである。

また[クルアーンの]章句の[ペルシア語での]意味は、次のとおりである。[すなわち]世界には、誰ひとりとして人間が存在せず、誰も「人(ādamī)」という名で呼ばれることがなかった長い時代があった。[続く章句にあるように、その後]「われは、彼を1滴の精液から創造し、彼に視覚と聴覚を授け、正しい道を示した。感謝する者は誰か、不信心者は誰か<sup>18)</sup>、ということである。

この章句からは、次のことが明らかとなろう。人間が存在する[真の]目的は、神を知るためなのである。そしてまた、そのお方を知るのとは、そのお恵みを知るときであり、ついでそのお力を知るのである。

鏡の解釈は次のとおりである。アッラーは最も良く知りたまう。[鏡とは]そなたが見ることができないものを、そなたに示してくれるものである。そこで私は、この本を「鏡」となるように編纂した。あらゆる世界の驚異をそなたに示すために。天界であれ、下界であれ、海や陸にある宮殿、砦、町、要塞[すべて]について私は記した。知れ、そして学ぶがよい。彼らがそこから何を得たか。またそなたは何を得るのか。至高なるアッラーのいわく、「かれらは、如何に多くの園と泉を残したか。また(豊かな)穀物の畑と、幸福な住まいを」[Q44: 25-26]。

次の逸話を覚えておくがよい。

(p. 12) <逸話>

ある男に1人の美しい妻がおり、1つの庭園と1冊の書物があった。彼は、ある日は庭園に行き、ある日は本を読み、ある日は妻と語らった。死が近づいたとき、[彼は]庭園に言った。「私はおまえに水を与え、瑞々しく保ってやった。今や私は逝こうとしている。おまえは私に何をしてくれるのだ?」

庭から声が聞こえた。「私には、あなたと一緒にいくための足がありません。あなたが去れば、別の人が来るでしょう。」

男は庭に失望し、それから妻に言った。「私はおまえのことばかり考えて生きてきた。おまえのためにさまざまな苦勞をした。今や私は逝こうとしている。おまえは何をしてくれるのか?」

[妻は]言った。「あなたが生きている限り、私はお仕えします。あなたが死んだら、私は嘆き悲しみます。あなたが[墓に]運ばれるときは、墓の縁まであなたとともに参ります。あなたが土の

---

18) 『クルアーン』第76章の冒頭1-3節を踏まえた表現である。

下にお隠れになるとときには、私は泣き叫びます。それから〔家に〕帰ってきます。〔そして〕別の人と結婚します。』

男は妻にも失望した。彼は本の方を向いて言った。「おお書物よ。私は逝こうとしている。おまえは何をしてくれる？」

〔本は〕言った。「私はあなたとともにおります。あなたが墓に入るなら、あなたのそば近くの友となりましょう。復活の日になれば、私があなたの手を取りましょう。決してあなたを放り出したりはしません。』

この逸話の意図するところは次のとおりである。すなわち、この世では、「学識」以上にすばらしい友は何ら存在しない。また来世では、いかなる財産もあなたの叫びには届かない。ただ「学識」を除いては、預言者や王や偉人たちは、常に「学識」を誇りとしてきた。〔たとえば〕アードムには書物 (ṣuḥuf-hā) があり、ムーサー (モーセ) (Mūsā) には律法 (tawrīyat) があり、ダーウードには詩篇 (zabūr) があり、そしてイーサーには福音書 (injīl) があつた。

スライマーンの妻ビルキース (Bilqīs)<sup>19)</sup> は、次のように書かれた書簡を受け取った。「それはスライマーンからのもので、『本当にそれはスライマーンから、慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において (齋されたもの)』 [Q27: 30]。彼女はそれを「尊い手紙 (kitāb karīm)」と呼んだ<sup>20)</sup>。そして書かれていたことを尊重すると、スライマーンと結婚した。

#### <逸話>

ある日、スライマーンは食事をとっていた。アーサフ (Āṣaf)<sup>21)</sup> が臨席していた。ビルキースが言った。(p. 13) 「この焼き魚が生き返ることは決してあり得ないのかしら？」

〔スライマーンは〕言った。「真実 (inṣāf) のあるところではどこであれ、死んだものが生き返る。さて、ひとりずつ、この魚が生き返るように真実を言おうではないか。」

アーサフは言った。「あなた様の国にあるものは何であれ、私のペンの下にあります。ですが私は、自分がスライマーンであつて、あなた様がアーサフであればよいのに、と思います。」

魚は動いた。

ビルキースが言った。「この世で私の夫ほどの夫を持っている人は誰もいないでしょう。世界中が彼のものであり、その彼は私のものです。けれども、彼よりも若い人を見るといつも、スライマーンがこれくらい若ければよいのに、と私は言ってしまう。」

魚はもう一度動いた。

最後にスライマーンが言った。「全世界は、富や財産もろとも私のものである。私は陸地と海における〔神の〕御使いである。ジンと人間のすべての王が私の命令のもとにある。そうではあるが、もし2人の人物が私のところにやって来て、1人は贈り物を携え、もう1人は何も持っていなければ、私は贈り物を持ってきた人物のほうを好ましく思う。」

彼がこの言葉を言うと、魚は生き返り、水壺の中に入った。

19) アラビア語文献に現れるサバア (シェバ) の女王のこと。ユダヤ教徒の伝承をはじめとして、彼女がスライマーンを訪問する物語は、中東地域に広く伝わっている。この部分は、『クルアーン』第27章22-44節のスライマーンによるサバアの女王の改宗話を踏まえている。『クルアーン』では彼女の名前は挙げられていないが、その注釈などではビルキースとされる [EF: Bilqīs]。

20) 『クルアーン』第27章29節に、「本当に尊い手紙 (kitāb karīm) がわたしに届けられました」とあることを踏まえたもの。

21) スライマーンの宰相として知られる。スライマーンの妻ジャラーダ (Jarāda) の偶像崇拜を非難したという伝承がある [EF: Āṣaf b. Barakhyā]。



この逸話から導かれることは、ビルキースは書かれたものを大切にしたので尊重されるようになった、ということである。ゆえに、賢明な人は書かれたものを軽んずることはなく、賢人たちの言葉を尊重するのである<sup>22)</sup>。

<逸話>

次のように言われている。ある貧者が、「おまえの糧はイस्कンダリーヤ (Iskandariya) の灯台<sup>23)</sup>の中にあり」という夢を見た。彼はこのことを気にもとめなかった。しかし、次の夜もまた同じ夢を見たので、[男は] 出立し、舟に乗った。というのも灯台は水の中から突き出ていたからである。彼は舟を灯台の周りに巡らせた。鳥が塔から飛び立ち、そこから一片の書き付けが落ちてきた。男が拾い上げると、そこには「心配事を抱く者は誰しも、あごの下の髭を梳け。さすればその心配事から解き放たれよう」と書かれていた。貧者は腹を立て、その書き付けを投げ捨てた。そして引き返し、山のおもいで (p. 14) 舟を降り、言った。「あの夢は悪魔 (dīw) が私に見せたのだ。」

そこで櫛をとり出し、あご髭を梳いていると、その山の上で何かが光り輝いているのが目に入った。大水が泥土を洗い流したために出てきた銅製の釜だった。その上の泥を取り払うと、釜の中には400個もの黄金の馬蹄があった。彼は袋に[馬蹄を] 詰め込み、その上を泥で隠し、家に持ち帰った。その後すべてを持ち帰り、そこから一財産つくった。[こうして] 貧者は貧しさの心配事から解放されたのである。

[この話の] 意図は、賢人の言葉や彼らの言ったことを軽んじてはならない、ということにある。この貧者はあの書片を投げ捨てたが、自身の過ちに気づいた。貧者に明らかになったように、あの書き付けが書かれた当時、非常に[学識ある] 賢人が存在したのである。その賢人はいたずらに書いたのではなく、またその洞察力の深さに限界を設けることはできない。もし人がそこまで至らないとしても、それは、その人の知識が足りないからである。

この話の意図は次のとおりである<sup>24)</sup>。公正さは賞賛されるものであり、[一方] 欲深さには際限がない。人は手に入れば入るほど求め、より貪欲になる。もし人が集めるほどに寿命が延び、食べていけるのであれば結構だが、集めても、[死後] 敵に渡すのであれば、それは捨ててしまうことと同じであろう。

私は現世のことについて考えたが、何ひとつ確実ではなく、何ひとつ永続しないと理解した。そこで、偉大なるスルターン、尊敬すべきシャーハンシャー、信徒のくびきの所有者、アラブとアジャムのスルターンたちの長、現世と信仰の柱、イスラームとその信徒を高める者、勝利の国運の援助者、輝く信仰の美、信徒の長の随行者、アブー・ターリブ・トゥグリル・ブン・アルスラーン・ブン・トゥグリル (Abū Tālib Tuḡril b. Arslān b. Tuḡril)<sup>25)</sup> ——彼の援助者を強め、彼の莊嚴さと権勢を増

22) この段落は、先のスライマーンの手紙とビルキースの話のあとに続けられるべきものであろう。サーデギー本にはこの段落は載せられていない。

23) 世界の七不思議の1つにも数えられるこの灯台については、アブダリー (al-'Abdarī) から引用したイブン・バットゥータが、「灯台は、高い丘の上にあり、灯台のある場所と町の間には、長く伸びた陸 [の岬] に沿って一フェルサフの隔りがある。そして周囲三面が海に囲まれて」いたと記している [イブン・バットゥータ著、家島彦一訳注『大旅行記』平凡社、1996年、第1巻、52頁]。

24) このまとめの部分は、直前の逸話とは内容がかみ合っておらず、おそらくはひとつ前の「真実・公正さ (insāf)」の逸話のまとめである可能性が高い。

25) セルジューク朝第17代スルターン、トゥグリル3世 (在位 1175-94年)。同時代史料ではその学識と軍事的才能を賞賛されたが、1194年レイ郊外でホラズム・シャー朝のテキシュとの戦いに敗れ、戦死する。彼の死をもってイラク・イラン西部で存続していたセルジューク朝は滅亡した [EP: Toghri(III)]。

したまえ——の善き行状、賞賛に値する名声、公正さ、統治、慈悲を私は目にし、(p. 15) 彼の良き名が永続し、永遠となるよう報いたいと望んだ。私は、いかなる名声や賞賛も、この本ほどに永続するとは思わない。永遠の想起とは第2の人生である。この本を編纂することによって、彼(トゥグリル)の死後も〔彼の名が本書とともに〕記憶され、彼の公正さと厚情への返礼となすことができるだろう。

<逸話>

次のように聞いている<sup>26)</sup>。ジャムシード (Jamšīd)<sup>27)</sup> は成功した王であった。彼が庭に座っていると、1匹の蛇が木に登り、雛を食べようと鷹の巣を狙っているのが目に入った。鷹は飛び立ち、巣の周りを廻っていた。ジャムシードは蛇に向けて矢を放ち、蛇を木に射止めた。鷹は蛇から安全になると、飛んでいき、1本の枝をくちばしにくわえて戻ってきた。そしてその枝をジャムシードの玉座の上に置いた。ジャムシードは言った。「鷹は頭のいい鳥だ。[救ってやった] 私に報いようとしている。この枝には、鷹が知っている益があるのだろう。」

[ジャムシードは]賢人たちに話してみたが、それが何であるのか、誰も知らなかった。彼らは言った。「このものの本質 (jawhar) は、水と土が明らかにしてくれるでしょう。」

[そこで] その枝を植え、そのために水をやった。やがて [枝は] 緑になり、細い蔓が現れ、大きな木に沿って伸びていき、木に絡まりながら上へと向かっていった。その果実はブドウであった。当時、ジャムシードはブドウを見たことがなかったが、彼の時代にこの実が発見されたことを喜び、彼は創造主に感謝した。彼は1人の賢人に尋ねた。「このブドウの特性は何か?」

賢人は実を搾り、その液をねかせた。しばらく経ったのち、[賢人は] 言った。「これには3つの状態があります。幼少期 [とも言うべき第1] の状態は果汁であり、分解と中和を行います。青年期は酒になりますが、それは、[人の] 生来の熱性を活性化させ、爽快感や快活さや魂の力を増大させます。ですが、知性の上に覆いかぶさるので、現世の災厄を目にすることはありません。そうして喜びを生み出すのです。3つ目の状態は、酔になります。酔はすばらしい存在で、腐敗の原因を取り除きます。しかし、心臓と肝臓の敵であり、老年期のような状態です。そうではありますが、(p.16) 蜂蜜や砂糖といった仲立ちするものと一緒に食すれば、[酔は] 血管の中を通り、病根を分解し、のどの渇きを抑え、胆汁の分泌を抑制します。」

ジャムシードは言った。「鳥にしてやったわずか1つの情けに対して、これほどの返礼をよこすとは。1本の枝に水をやったら、その枝はわれわれに果汁と酔と酒をもたらした。われらは1羽の鷹や1本の枝よりも志が低くあってはならないのだ。」

この逸話は、私は、善きに報いるものではないが、この帝王の圧制 (zulm) を受けずに安らいでいたことに感謝するものであることを示すためである。安らぎとは、いかなる厚情にもまさると私は思う。あらゆる善には果報があり、あらゆる悪には処罰がある。私は人々の記憶に残るよう、公正さ ('adl) に見合うものとしてこの書を著した<sup>28)</sup>。なぜならこの世に確実なものなどなく、そこ

26) ブドウからワインが発見される逸話は『ノウルーズの書 (Nawrūz-nāma)』にも見られ、細部は異なるが、話の大筋は同じである [‘Umar Ḥayyām Nišābūrī, *Nawrūz-nāma*, Ed. M. Mīnuvī, Intiṣārāt-i Asāṭir, Tehran, Repr. 1380, pp. 65–70]。

27) イランの伝説の王。武器や織物、宝石、香料などさまざまなものを生み出し、人間に供した。インドのヤマとも同一視される。

28) この部分は文意が取りにくい、ここで言われる「この帝王」とは先のトゥグリル3世のことを指し、トゥグリル3世が「圧制 (zulm)」を行わない、すなわち「公正 ('adl)」な君主であり、そのような厚情をなしてくれたことへの返礼として本書を執筆した、ということであろう。ジャムシードの逸話との関連で言えば、トゥグリルはジャムシードに、著者は鷹に、そして本書が1本のブドウの枝にたとえられている。

にあるものは〔何ひとつ〕永続しないからである。私は言おう、

知れ、おまえがなした行為は  
勘定され、そしておまえが生み出したものは受け継がれていくのだ

ゆえに、学識者たちは現世の中から英知を選びとり、学識でもって友を集め、学識でもって敵を征し、敵への返答には証拠 (hujjat) を用いて応じてきたのである。

たとえ〔運命の輪たる〕天輪や天空が汝の敵であるとしても、汝が証拠でもって  
天輪と対峙するならば、いかなる状況にも対処し得よう

知性ある者たちは、現世の中では学識を重んじた。いわく、「時代におけるよき伴侶は書物である」と。そうであるからこそ、英知ある言葉を城砦の門や岩に刻みつけたのであった。たとえば、カイラワーン (Qayrawān) の城門やハラマーン (Haramān) の城砦やサマルカンド (Samarqand) の城壁やアルヴァンド (Arwand) の碑文のように<sup>29)</sup>。彼らは〔それらを刻むことによって〕彼らの名が永遠に残ることを求めたのである。

私は、書物の中で目にした記述や、流離い人や旅人たちから聞いたことを集めて、本書を執筆した。〔本書の中の〕いくつかのことは、それを目で確かめることはできないが、明らかであるようなことである。それはたとえば、最も偉大な驚異である諸天や月や太陽のことであり、これら〔の話〕の端には「ظ」、すなわち「明らかである (zāhir ast)」と印をつけた。またいくつかのものは、論拠を要し (p. 17)、長い年月によってそれが可能となるものである。たとえば、ルーム (Rūm) やアンダルス (Andalus) の護符 (ṭilasm) といったもので、それらの端には「بع」、すなわち「時間を要する (ba'īd ast)」と記した。またあるものは、『クルアーン』や伝承がそれについて語っているか、あるいは知覚できるようなものである。それらについては、「صد」、すなわち「真実である (ṣidq ast)」と記した。あるものは、書物の中で繰り返し伝えられているような驚嘆すべき事柄であり、その端には「مع」、すなわち「知られている (ma'rūf ast)」と記した。あるものは、私が旅人から聞いた珍奇な事柄であり、それらについては確固たる論拠がない一方、それが虚偽だと言うこともできないものである。それらの端には「شبه」、すなわち「疑わしい (subhat)」と印をつけた。というのも、否定してしまうことは凶事だからである。

たとえば、ある人がルームやアンダルスやカンダハール (Qandahār) やムルターン (Mūltān) の驚異について何か述べたとしよう。〔しかし〕その人にその証拠を求めたところで、一生かかってその真偽を判断することは不可能である。ある人がある町に生まれ、生涯そこで過ごしたとしても、町中のすべてを見ることはなかった、という場合もあろう。ある時期私はイスファハーン (Iṣfahān) にいたが、私に次のように尋ねる人がいた。「アルヴァンドの壁面には数行の碑が刻まれており、それを『神々の碑』と呼んでいるようだ。君は見たことがあるか?」と。私は、「存じ上げません」と答えた。彼は1冊の著名な本を取り出した。その本の中ではそれについて記され、驚嘆すべきものだとの説明があった。私はハマダーンに来るや、〔その碑を〕目指して出かけ、それを見た。驚くべきかな!まさに、百聞は一見に如かずであった。その碑文は、偉大な王の時代の英知ある人の作品であることを証明していた。この話については、アッラーが望みたまうならば、私

29) これらの遺跡については本文中で述べられる。

は岩壁の章で述べよう。

さて、人が自分の町の驚異についてさえ知らない場合、他の町のことを知らないとしても、何を不思議がることであろうか。つまりは、(p. 18) 否定することは賞賛されることではない、ということであり、たとえ誰が見なかったとしても、他の人々も見えていないとは限らないのである。

私はこれらの驚異を書にまとめ『驚異の書 (‘Ajāyib-nāma)』とし]た。イスラームの民がこれを読み、創造主の創造について思いを巡らせるためである。預言者——アッラーが彼に平安と祝福を授けられんことを——のいわく、「一時の沈思熟考は 60 年の信仰儀礼にもまさる」とあるように。そしてまた、創造主を全能と知るためである。私は読者に期待しよう。褒美としての祈りではなく、返礼としての祈りを。

#### <逸話>

ある人がハサン・バスリー (Ḥasan-i Baṣrī)<sup>30)</sup>に尋ねた。「どうしてハッジャージュ・ブン・ユースフ (Ḥajjāj b. Yūsuf)<sup>31)</sup>を、寛大なアミールだと認めないのですか？」

[ハサン・バスリーは] 言った。「彼の寛大さはいかほどか？」

答えて言った。「ある日、彼は狩りに出かけました。1 粒が 1 ミスカール<sup>32)</sup>もある真珠 100 粒を数珠つなぎにして鳥に放ちましたが、彼は気にも留めませんでした。」

ハサン・バスリーは言った。「ハッジャージュは浪費家だ。100 粒の無生物を投げて、100 体の動物の生命を身体から切り離すとは。このようなことがどうして誇るにふさわしいのか。私は今日、内輪の集まりの席で、英知と訓戒ある言葉を 200 以上も述べたが、[それでもって] 多くの死んだような者の心や眠った者の眼を開かせた。英知の宝石が無生物の宝石と同等だと私は思わない。神の被造物に対して私が施す恵みは、ハッジャージュの恵みよりも優れていると思うのだ。」

この章はこのくらいで十分であろう。ついで、この本をどのように構成したか述べよう。私は、天の玉座たる珠 (durrat al-‘arṣ) から [本書を] 始め、大地の微粒子 (ḡarrat al-farṣ) で終えることにしよう。もし、世界中を映し出す杯とは何かと尋ねられたら、この本のことであると言うのがよい。世界中にあるものは何であれ、そなたに示されるであろうから。さて、私は本書の目次を記しておこう。至高なるアッラーが望みたもうならば。

本書は 10 の基本項目からなる。

(p. 19)

第 1 部： 天体の驚異について。

天使、霊的なもの、[天の] 北極と南極、諸天の驚異、太陽の驚異、月の驚異、惑星の驚異、[十二] 宮の驚異、恒星の驚異、それらの驚くべきことに関する各章。

第 2 部： 火と天地の間で生じるものの驚異について。

30) ウマイヤ朝の高名な禁欲主義者 (728 年没)。多くの弟子を養成し、後世、最初のスーフィーとされた。世俗的権力と化したウマイヤ朝を公然と批判した [EF: Ḥasan al-Baṣrī]。

31) ウマイヤ朝中期の軍人 (724 年没)。ウマイヤ朝第 5 代カリフ、アブドゥルマリクに登用され、第二次内乱を終結させる。メディナ総督を経て、イラク総督に任命され、武断政治によって治安の回復に努めると同時に、中央アジアや西北インドの征服活動を進めた [EF: al-Ḥajjāj b. Yūsuf]。

32) 重さの単位。時代・地域によって実際の重さは異なるが、約 4.3 ~ 4.8 グラムに相当 [Hintz, W. *Islamische Masse und Gewichte*, E. J. Brill, 1970, pp. 2-8]。

マジ (majūs) や火を崇める者たちの不幸、稲妻・流星・雷鳴とは何か、虹とは何か、風の驚異、微風や烈風の分類、雲の驚異、空気中の驚くべきこと。

第3部： 大地と水と海の驚異について——文字列の順に従って分類される——。

川の驚異、泉の驚異、掘削された井戸の驚異、大地の驚異、世界と諸地域の分類、世界の地勢と形状、山の驚異——文字列の順に——、岩の驚異とそこに記された英知。

第4部： 名高い町とモスクについて——この章は文字列の順に従って分類される。たとえば、アリのフの章では、イーリヤー (Īliyā)、イスカンダリーヤ (Iskandarīya)、アンダルス (Andalus) など、パーの章では、バズラ (Bašra)、バグダード (Bağdād) など——。

イスラームのモスクの驚異、他のもろもろの民の礼拝所、各地にある転覆した河床や海、陥没地、過去に生じた地震、破壊的な暴風に関する各章。

第5部： 樹木と香草について——文字列の順に従って分類される——、知られていない樹木の驚異について。

第6部： 護符として刻まれた彫像の驚異、(p. 20) 預言者たち——彼らに平安あれ——の墓廟や諸王の墓の驚異、王や皇帝たちの誰かが埋めた財宝の驚異とその末路について。

第7部： 人間の驚異とその栄誉ある創造について。

すべての被造物にまさる理性という栄誉、魂の驚異、魂の居所、肉体への魂の影響、心臓の驚異、魂の本質、五感の驚異、アードムの子孫の身体部位の特徴、女性や宦官の気質、いくつかの種類に分けられる人間の諸階層の驚異、平凡な人々の驚異、各時代の稀有な人々の驚異、テュルク (turkân) やグズ (guzân) やキプチャーク (qifčāq) の諸部族、インド人 (hindwân) の諸部族、彼らの種類、高貴な人々の位階の高さ、我々の預言者——彼に平安あれ——の高貴さについて、預言者と偽預言者の差異、占師や僭称者、偉大なる事績や奇跡の驚異、錬金術、医学、自然、食事の特性、伝えられている稀有な治療法、神の定めと天命について、夢の驚異、死の驚異、現世の欠点とその気まぐれさ、復活と神の審判について。

第8部： ジンと死者とシャイターンの驚異について。

ゲールヤナスナースの種類とそれらの居場所、さまざまな種族とそれらのすばらしさの驚異。

第9部： 大小の鳥の驚異について。

第10部： 獣について。

巨大な動物、海の動物、猛獣、昆虫、蛇、有毒動物などの驚異。

以上が本書の目次であり、私は第1部から記述していこう。至高なるアッラーの御名において。